

この世にトの眺め

文・村田喜代子

写真・毛利一枝

日曜日の昼、はたと思いついて、こないだ手に入れたイタリアの戯曲の本を取り出した。戯曲を読むだけでなく、劇場公演のDVDも付いた驚愕な本だ。ビデオの操作は面倒で、思いついたときが観ときである。

『エドゥアルド・デ・フィリツボ戯曲集』(イタリア会館・福岡刊行)の第一巻で、泥棒を生業とする主人公のフルネーム「ユ・フレートレ・ウィンチェンツォ」が芝居の題名になっている。

作者の故エドゥアルド・デ・フィリツボは、イタリアでは上演中、熱狂的な拍手に芝居が立ち往生するほどだったというが、日本ではマストロヤンニ、ソフィア・ローレンの共演した映画『あゝ結婚』の原作者と言ったほうが通りがいいだろう。

舞台の幕が開くと、アパートの部屋で朝寝していた泥棒が、大家に起こされる場面だ。おおいかにナボリのくまのたらのような伊達男の顔である。つまり女心をくすぐるタイプ。大家の運んできた朝食をベッドで食べ

て、服を着替える。戯曲を文字で読むだけでは感じ取れないものがある。細身の茶のストゥに眼の覚めるような、雫色のシャツだ。吐息がもれる。何てお洒落！左手薬指に赤い石の指輪をはめている。茶に雫色に赤である。

貴族の末裔と信じている泥棒のストゥ姿には、イタリア男の服のセンスが決まっている。煙草屋のおやじの役を作者のエドゥアルドが演じているが、一見ただの老店主だけど、よく見ると烏打ち帽にサスペンダーのスボンが、さりげなきを装っているが、じつに羨い。

芝居の舞台は、かつてメルウ

イルが「世界で最も美しい国に、最も愚かな人間が住んでいる」と言った、すり、ひったくり、泥棒、ギャング、人間凶鑑をなまで見るナボリである。いかにわしきは人間の宿命的な属性だ。そしてヒューマニティの証でもある。

だから主人公のウィンチェンツォが金持ちの財布を握ると観客は拍手し、拳銃で撃たれて死ぬと、この哀れな、仕事熱心で、空瓶洗いの貧しい恋人を持つ、妙に信心深い男が天国に行けるよう、応援せずにはおれなくなる。この男は、こもあろうに銅像の聖ヨゼフが、みなし子の自分を必ず守護すると思っ

いたのだ。
こんな脳天気な人間の物語は、まずよその国では考えられない。そう思ったとき舞台の上に、私の生まれた北九州八幡の町が重なる。製鉄で栄えた土地には西日本一帯から職を求めて大勢の人々が集まった。そこで私の大叔父は下宿業兼金貸し業をやっていた。小学校から帰ると私はその家に入り浸っていた。
ときどき旅の浪曲師が泊まった。夜になると浪曲師は自分で白幕を張った舞台を作り、大叔父が盆栽の松を飾る。近所の人々が聴きにきた。浪曲師は扇子を叩き、突拍子もない大音声で唸った。聴衆には彫り物をした男も、普通の人もいろいろだった。外では製鉄所の工場の真っ赤な火が、夜空を染めていた。
大叔父がある日どこから、大きな観音像を持ち込んだことがあった。貸したお金の代わりに貰ってきたようだ。彼は仕方なく毎朝、お仏飯とお茶を供える。大叔父が長く病気で臥せっ

て、下宿人の食事や買い物、洗濯もするので忙しく、彼の唯一の楽しみは晩酌だった。
ある夜、一人でケチケチして作った粗末な酒のアテで飲んでみると、部屋の隅の観音像に眼が行った。仏像はあくらをかいて、片手の指で輪をつくり、もう片方の掌を大叔父の方に差し出している。大叔父は何だかぶち切れて、怒鳴った。
「なに。お前はこの上にまた何か、わしにくれと言っのか！」
一升瓶が振り上げられ、ガツシャーン！と激しい音がして、電灯の明かりに虹みtainな酒と瓶のカケラが飛び散った。
その晩、大叔父は胃腸で吐血して昏倒した。バチが当たったと祖母たちはささやき合ったものだ。
春には私の祖母やその大叔父、近所揃って、こ詠歌を上げながら瀬路に出かけた。八幡もナボリに負けてない、何でもありの町だった。
ただ、エドゥアルドの戯曲と違つのは、製鉄所に通う隣家のおやじさんは、家に帰ると夏場は赤い裃姿だった。遙かギリシヤに源流をたどるナボリには、当時の日本の文化都市八幡も、ファッションでは敵わなかった。

神も仏もあります

さあ。いらっしやい。
いらっしやい。
何でもありの人間凶鑑だ。

◆作家の村田喜代子さんのエッセーと、装丁家の毛利一枝さんの写真によるコラージュ・シジョン連載です。月1回掲載

